

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ① (H27/12)

荒寺だった乗泉寺を、東日本一円にご弘通を展開する大寺院へと急成長させた日欽上人のご門下で、長く宗門の大黒柱として全国の指揮を執られた日晨上人の片腕として活躍され、厳しいお折伏で北海道のご弘通を切り拓かれた石岡日養上人のご講話から「役中ご奉公のポイント」を学びます。本稿は石岡上人が第十七世講有として第九支庁にご巡教された際、記念に抄録としてまとめられた『ご奉公のかなめ』（第九支庁刊）から拝見します。

「入信当初に教えておくこと」

◎「ご講有上人のお言葉より」

- ・ 御利益の邪魔になるのは「我」が出るときである。
- ・ 子が親を親身に世話するように、仏さま、お祖師さまに仕える。水臭く仕えるのは駄目。
- ・ 常に力に応じて、無理するようににお初穂をあげなさい。
- ・ 黙々と功德を積み、平凡なことを馬鹿にしてはいけない。
- ・ ご奉公は、させてくださいと願うてさせていただく。喜んで勤めることが大事。
- ・ ご奉公と欲とを取り替えしなさんな。
- ・ どんな財でも、我が家に置いていたのでは功德にならない。

① 朝参詣を勧める。追いかけて、千日参詣を勧める

▼朝参りするように勧める。厳しすぎるようであるが、あとになって喜ばれる……朝参詣は日常信行の基本です。「朝、一番にお寺の御宝前にご挨拶させていただこうという思い」「そのために、一日の最初の時間をお寺参詣に使うこと」「実際にご参詣させていただくための労力、努力」「本堂で大きな声で口唱して始まる生活」「日々信行を改善する御法門の聴聞」「ご回向や諸有志奉納の功德」「信友、善友に親近(しんこん)：交わること)する功德」等々、ご信心の上でも、健康の上でも、一日を規則正しく送る上でも、良いことづくめの朝参詣です。しかし、朝は慌ただしく時間が過ぎます。ゆえに馴れない人は、かなり無理をし、努力しないと朝参詣ができません。そこで初心の人には遠慮して、「まだ早い」「もう少しキャリアを積んでから」等と勧めない例も少なくないのですが、石岡上人は「厳しすぎるようだが」と断って、まず朝参詣を勧めるのが育成の基本と指導されました。

▼電車代やバス代がないと言え、私は歩いてお参詣するよう勧めました……無理に勧めると「出来ない言い訳」をする人がいます。「お金がない」「体調が悪い」はその典型です。経済的に困窮していたり、体調が優れないと言われると、それでも無理せよとは言いにくくなるのが人情ですが、しかし、そこで「お金ができたら来てね」「元気になったら頼むよ」とあきらめてしまうと、相手にご信心を掴ませ損ねます。楽々と努めるご奉公では功德が積みにくいからです。困っているときや辛いときほど頑張った功德は大きいのですから、「ここが御利益のいただかせどき」と心得、どうしても朝参詣させよと教えられたのです。

▼実践すれば、必ず御利益をいただき、組内の御講参詣、組内のご奉公、お寺のご奉公も、気軽にさせていただけるように育成されます……実際に朝参詣の習慣が身に付くことで、多くの方がご信心を早く覚えます。御法門で学び、先輩の刺激を得、自ら積んだ功德を実感するのですから育成も早く、弘通の戦力として成長できるのです。馴れるまでは声をかけ、千日参詣などの目標を示してあげながら、初心者や若手のサポートに努めましょう。

【御教歌】 朝起はなる程妙な徳がある して見ぬ人はこれもわからず

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ② (H28/1)

「入信当初に教えておくこと」

② 一日一軒のお助行励行。次の助行先一軒へは連れて行く

▼新教化を連れて歩いて、お助行が気軽にできる習慣をつける……お助行は本門佛立宗を代表する素晴らしいご奉公で、十八世日地上人は「菩薩の愛情パトロール」と教えました。相手のご信心を励まし、現証を目の当たりにするご弘通の第一線の現場は、菩薩の化他の口唱の大事を学ぶ場でもあります。お看経の仕方やお莊嚴のヒント、折伏のツボやご奉公のポイントなど、総合的にご信心を磨けます。これを気負わず、日常的にせよと仰せです。

▼他家の御宝前にご参詣させていただいて、だんだん信心が増進します。また、早く御利益をいただく道を体得できますから、教化親や班長さんが、新教化宅にお助行させていただくばかりでは、中々一人歩きは難しいようです。お助行に一軒だけ連れて歩くのです。先方も御利益をいただき、こちらでも御利益を蒙りますから、ご信心が固まります。お役中さん、婦人会の方々が、お尻も軽く足まめに回ることを身に付ける……育成対象者宅に行くだけでは不十分。その方を連れ、他の家に行きなさいと仰せです。馴れない人や忙しい人も、一軒で良いから連れて行けど。つまり受け身では、ご信心は育たないのです。そんな、最高の育成環境を整えるためにも、役中や婦人会は普段からマメに巡回せよと教えられたのです。

▼ここで気を付けなければならぬことは、礼儀を崩さぬよう、言葉遣いもゾンザイにならぬように用心をする。馴れ馴れしくしますと、親しみのあまり、親子か兄弟のようになり、茶の間や台所に入り込んで戸棚を開けたりするようになると、行き過ぎとなり、お助行を喜ばぬようになります。招かざる客として、先方の奥さんが「なんて非常識なんでしょう」と罪障を起こし、終には御本尊をお捲きしてくださいと言って、いくらお話ししても、再び元に戻らなくなります。心安くなっても、言葉遣いや無作法な振る舞いは慎みませぬと失敗いたします……馴れると凶々しくなり、礼儀が損なわれ、言葉遣いも雑になります。特に石岡上人の時代より現在は、よりプライベート意識が強く、近所の人付き合いも疎いのですから、これは余程気をつけねばなりません。昔から「親しき中にも礼儀あり」です。

▼常識はずれのこととは、よく用心することです。立ち入ってもらいたくないところは、ごご家庭もあるはずですから、お構いなしに、どこでも出入りすることは禁物です。もちろん、ご如才はないと存じますが、念のため申し添えます。長続きするお付き合いは、普通、常識で守るべきことを崩さぬことです。礼儀と言葉は丁寧にしたほうが、喜んで迎えてくれるようです……よそよそしい薄っぺらな付き合いをせよと言うことではありません。生活の中に一歩踏み込んで、ご信心が身に付くようお世話をさせていただくのがご信心ですが、そこに礼節を忘れず、相手に敬意を持って丁寧に接していくのが不軽流のご奉公なのです。

▼もう一つ、申し添えたいことは、金銭の貸し借りは法度とおっしゃってありますから、どんなに親しいお友だち同士であっても、金銭は貸したり借りたりしないことです。御利益がとまってしまい、貸したほうは信心を辞めると言い、借りたほうも益々苦しくなって、終には夜逃げした方もあります。信心だけで清らかなお付き合いをして、情実を作らぬことです。お互いに親しくなるときは、用心堅固にお誠めを守るように致しましょう。み教えを踏み倒しているお方は、切り替えるときです……親しくなると、お金の無心をされても断れず、おかしな関係が出来るケースが実際にあります。お金で助ける宗旨ではありません。

「御教歌」 助行には連れて歩けよ新教化 御利益を見て信心を増す

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ③ (H28/2)

「入信当初に教えておくこと」

③ お教化をすることを教える

ベテランの役中さんでも宗外者にご信心の話ができない方、そして「お教化は苦手」と言われる方もあります。それが「お教化は難しい」というイメージを育て、だから「新しい人や若い人には無理。少しずつ教えよう」と考えてしまう方程式が出来がちです。

しかし、新しいご信者や若いご信者も、実際には良いお教化を成就されます。思うに、「このご信心をさせていただこう」と決心させた御利益の感動やご信心への随喜心など、思いが純粹で新鮮な分、行動も早く、相手にも気持ち伝わるのでしよう。若い人が案外お教化が出来るようになるのも、若さ特有の行動力と純粹さが共通する所以です。そもそもお教化は、知恵や才覚、弁舌の巧みさや経験でするのではなく、「現証のご利益でするのだ」と開導聖人は仰せです。と言うことは、よりご信心への喜びが深いほど出来るので、新しいとか若いといったことは本来あまり関係がないのです。ですから初心者扱いをせず、佛立信心の基本として、最初からご弘通教化に挑戦することを教えなさいと仰せなのです。新入信徒がお教化を通じてご信心を覚えていけば、それが組内の活性化にもつながると石岡上人は教えておられます。自分の苦手は二の次にして、ご弘通のため、これから御利益をたくさんいただいで欲しい相手の方のために、お教化の大事なことを教えましょう。

【御教歌】 君が為つとめ励むとおもひしが わが身を立るもにてありけり

④ 御講願主になることを勧める

御講はご信心を磨く場で、御講に参ることでご信者らしい物の見方を身に付け、功德が積めるようにもなると開導聖人は教えています。ですから、育成に悩むなら「どう教えるか」「どう説得するか」と頭を使うより、御講に参らせる工夫を考える方が大事です。

実際、お教化がよく出来る方の中には下種者を御講に連れて来る人もあります。教化子の育成上手も朝参詣や御講に連れ参詣をされます。法灯相続が出来る家の多くは、家族で御講参詣をされています。つまり、開導聖人が考案された「ご信心を磨く道場」という素晴らしい教育システムがあるのに、それに気付かず自身の才覚と理屈で教えようとするから、育成が難しくなるのです。そもそも、これも御講の役割の素晴らしさを知らず、仕方なしに嫌々参るような人にかぎって、「新しい人や若い人は御講はまだ早い」と自身の苦意思識を転嫁している場合が多いのです。まず、「御講に参らせる」意識を持ちましょう。

・御講の有難さを教えるのは、教えの上から説明するよりも体験談の方が分かり易いのは当然です。身近なところでは『びっくりす』の六号でも高橋玲子さん(二十六頁)、坂本道子さん(九十四頁)、佐野かおりさん(百六十頁)等が御講の功德を語られています。

・参れる日程や時間帯の工夫は大事です。ベテランの方は無理な日程でも信心が勝てば、やり繰りをしてお参りされますが、慣れない人はそうはいきません。参らせたい相手の予定を聞いてあげ、早めにお教務さんと日時の打ち合わせをしましょう。

・たとえ諸般の事情で参れなくても、御講の願主となって毎月お添講をさせていただくとを教えます。毎月、御講の願主として心を込めて布施供養することを実践し、毎月、御布施を届けることで御講参詣を意識できるようにすれば、本人が参る工夫を始めます。添講願主を雑に考え、「最初からさせない」「お金だけ集める」では、信心が育ちません。

【御教歌】 そんならと思ふがゆるに参詣も つとむることもすすまざりけり

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ④ (H27/11)

「入信当初に教えておくこと」

⑤ お初穂をとることを勧める

「お初穂」は神仏に感謝してお供えする、最初に収穫したお米のことです。転じてお金や物をまず自分のために使わず、最初に御宝前にお供えすることを「お初」と言い、なんでも御宝前第一にお給仕することを「お初穂の信心」と言います。

石岡上人はこのご信心の大事な筋道を厳しく教えられ、特に日本が貧しかった時代、貧しく苦勞している人ほど「お初のお供え」を徹底させて財の功德を積ませ、経済の御利益へと導かれました。「幹が枯れば枝葉も枯れる」と仰って、本山初灯明料の奉納を最優先されたのも石岡上人の特色で、ために北海道のご信者は、今も全国トップクラスの奉納をされています。財は凡夫の関心が高く、ゆえに力も入り、御利益も早く、結果的にご信心を掴む近道となるのです。以下、この項は石岡上人のお言葉をそのまま掲載いたします。

▼初心の間に、入信当初から「お初」を取って別にしておくことを教える。気持ちよく、ご信心のためにお金を使わせていただけるように工夫させる。

▼財の功德を積むことを最初に教えて習慣づける。病氣したり、災難にあったりして、嫌な思いをしてお金を使い、年中貧乏している、そういう人には特に教える。

▼お金がないほど辛いことはありません。その中から、仏におあげすることを教えるのですから、そういう人はなかなか快くお金をおあげ出来ない。そこで「お金が入ったときに、お初を取りなさい」と教えておく。特に夕食の支度で野菜や魚を買ったり、お湯銭を惜しげなく使って、なけなしの財布の中から仏におあげすることは、残り物をケチケチおあげすることになります。欲心に汚れた供養は、仏はご納受になりません。

▼同じ千円でも、お初を気持ちよく取っておあげすればご納受くださるから、一粒万倍の御利益をいただきます。御利益はテキメンに蒙ります。欲のない人はございせんから、一旦味をしめたら止められなくなります。お金持ちが小切手を切って多額の御有志をされるのは楽々とおあげなされるのですから、前者とは思いに天地の差があります。

▼身体のご奉公は出来やすいが、財のご奉公はなかなか覚え難いようです。惜しい、欲しいの気持ちが強いので、それに負けないで「お初」を取って、おあげできたら、欲心に勝ったのです。貧乏の根を断ち切って、福の御利益の種まきに力を入れるように切り替えてご覧なさいませ。きつとあとで喜べます。

▼「お初穂」を取って仏におあげして、安心してご奉公させていただけば、家業も栄え、親子円満になる近道です。信心とは、気持ちよく命から二番目のお金を使うことです。

▼「お初」は欲のために使用しますと、必ず後悔します。一旦、御法さまのためという「ための字」がついた御宝には、手を付けてはいけません。「はじめは事なきやうなれども、ついには滅びざるはなし」との御慈誠を堅く慎み守ってご覧なさいませ。一粒万倍ということ、身を以て知らせてくださいませ。

▼初心の間に、またお子さまやお孫さまにも、小さいときに身に付くようにさせて覚えさせることです。財産より信心の宝を身に付けて、世の中に出してやれば一番喜ばれます。親は（お初のお供えを）なされても、子供さん、お孫さんにまでよく仕込んでおくお方は、割合多くはないようです。財のご奉公の切り替えの大事な点です。

【御教歌】 御初穂は第六天に奉り 仏に上げる己が残物

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ⑤ (H28/3)

「入信当初に教えておくこと」

⑥お教務さんや役中さんの陰口を言わぬこと

教えを説くお教務さんが「私を敬え」とやり始めると、それはまるで怪しげな教祖と紙一重です。そこで、これを積極的に教える人は少ないのですが、ご信心では「教えの師」への敬いは重要で、そこを欠くとご信心が育たないばかりでなく、自身を墮獄させるとも戒められます。そもそも仏教では、仏道修行者をどう捉えているかを見ていきます。

▼南方の仏教国では「ブツダム・サラナム・ガツチャーミ(私は法に帰依します。自帰依法)」。サンガム・サラナム・ガツチャーミ(私は僧に帰依します。自帰依僧)というパーリ語の三帰依の文を唱えます。人を幸福にする普遍の「法」とそれを覚つて示した「仏」、そして、それを学び伝える「僧」を、仏教では古来「三宝」と呼び、仏法存続の根本として最も大切にするのです。

▼仏教思想による国造りを目指した聖徳太子の十七条の憲法にも、第二条は「篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧なり(略)それ三宝に帰せずんば何をもつてかまがれるを直くせん」とその支柱に三宝護持があげられ、以後は日本でも仏教の根幹として認知されていきます。

▼この三宝について、お祖師さまは「仏法を習うものは必ず四恩を報ずべき」と仏典の「一切衆生の恩」「父母の恩」「国主の恩」「三宝の恩」を示され、三宝に僧を数える訳を「僧の恩を言わば、仏宝、法宝は必ず僧によて住す。譬えば薪なくば火なく、大地なければ草木生ずべからず」(四恩抄)と記されています。年年歳歳怠りなく仏の教えを求め、正しく学んで伝える僧があればこそ、多くの人が仏の慈悲に救われると知り、報えと教えたのです。

▼故に法華経では、法師品に「もし法師に親近せば速やかに菩薩の道を得、この師に随順して学せば恒沙の仏を見奉ることを得ん」と、僧に近づき学ぶことが仏果成就の道と教え、また陀羅尼品には「もしこの法師を侵毀する者は、すなわち諸仏を侵毀しおわるなり(略)説法者を悩乱せば、頭破れて七分になる(略)法華の名を受持せん者を擁護せんすら福量るべからず」と説かれて、御題目受持の行者誹謗の罪の大きさと、外護の功德を説かれます。

▼もちろん、在家の身でも正法を護持し、如説行に励むご信者は法師に準ずる仏弟子であり、法華経の行者です。そこでお祖師さまも「正法を持てる智者ありとも旦那なくんば争か弘まるべき(四条金吾殿御返事)」と、そんな在家の行者の、弘通における大きな役割を教えています。正直にご奉公に励む役中さんを誇る罪が「大きい」と戒められる所以です。

▼ただし、行者が尊いのは正しくご信心を守るからで、名聞利養の世渡り坊主についてはお祖師さまも「法師の皮を著たる畜生なり」(松野殿御返事)と厳しく折伏されています。ですから求道心に欠け、自己流のご信心で済ます人は、真摯に改良せねばなりません。

▼家庭機能の崩壊の原因に、父親の権威喪失をあげて人があります。学校崩壊の一因として、モンスターペアレントの出現をあげ、先生への敬意が失われたことを指摘する人もいます。「敬われない側も悪い」も分かれますが、敬うことで人が育ち、核が出来ることで家庭や学校等の教育環境が整うのも一理。同様に、役中がお教務さんを敬う空気が弘通の核となる人材を育て、やる気に満ちたご奉公の環境を整えます。陰口の空気はその逆です。

▼そもそも、お祖師さまは「人を敬うことを教えるのが教主釈尊の出世の本懐」とまで仰せです。自己中心で慢心が強く、故に人を見下す陰口を、喜ばれる道理がありません。

【御教歌】 妙法を受持する人を毀りなば おのが功德は其時に消

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ⑥ (H28/4)

⑦育成に卒業はない。

ある程度ご奉公が出来るようになると、「せっかくなきゃつてくれているのに、うるさく言つてやる気をなくしても……」と心配し、「だんだん覚えて成長するから」と育成の手を緩めたり、「ここまで出来れば上出来」と妥協したりしがちです。しかし石岡上人は、「最高のご信心を学ぶのだから、一流の信者を極めよ」と仰せで、そのポイントを挙げられます。

▼慢心を戒める……何の世界も「慢心」を嫌います。慢心は向上心を失わせ、自身の成長を止めるからです。涅槃経に示される積尊の最後の戒めの一つも、慢心についてでした。慢心者への指導を問われた積尊は、慢心のある間は何を教えても無駄だと諭されるのです。御題目を唱えることはもちろん、易行宗と教わる法華経本門のご信心は誰でもすぐに覚えて出来ませんが、口唱もお給仕も受付けのお当番も、謙虚に道を究める姿勢を教えましょう。

▼体で功德を積むことを教える……世の中、便利になりました。昔の人に比べると、今は仕事も家事もご奉公も、いろんな分野で楽が出来ます。ただ、この恵まれた環境は「功德を積む基本は体や心や時間を使うことにある」という大原則を、時に忘れさせます。車でサツと参る人より、時間をかけて歩いてでも参ろうと思ひ、実際に汗を流して参詣する人に、より深い功德が宿ります。たくさんの財産の一部をポンと御有志する人よりも、悩んで節約しながら奉納する人の財の功德はより大きくなります。ご供養づくりもお掃除も、楽をするより体を使って功德を積むことで、私たちの罪障は確実に消滅していくのです。

▼組の発展に敏感な感性を育てる……自分のご奉公が組の発展にどう関わったのかを感じ、組が良くなるために努力できるのは、それだけ主体的に臨んでいる証拠です。当然、「言われたことだけやる」「与えられた役割をこなす」といった姿勢より、より深くご信心が育てていますし、そんな姿勢がご奉公環境を整え、更に「やりがい」や充実感のあるご信心を育てます。部分的なご奉公より、組の発展を支える一員としての意識を育てましょう。

▼家族を大事にする……ご奉公が面白くなつてくると、熱心なご信者とお付き合ひが楽しくなり、ご信心の理解の薄い人を軽くみたり遠ざけたりする人がいます。それが家族になると大変です。なぜなら、家族は自分のご奉公を支える基盤でもあるからです。家族の理解がないとご奉公に支障が出ますし、ひどくなると家庭を崩壊させることもあります。ですから、ご奉公で時間が取られる分、言葉や態度に心を籠めるのももちろん、ご信心で習った菩薩的な所作振舞を家族に向けて「施す」、そんな信行の実践も教えましょう。

▼家業を大切に……ご信心が大事で家庭も家業もほつたらかし、ご弘通一筋の豪傑の話もありますが、お祖師さまは強信者の四条金吾さんを励まして、仕事もご信心も素晴らしいと鎌倉中の人に言われる程になれと仰せです。ですから基本は、安定したご信心を支える生活基盤を疎かにしないことで、故に家業も大事にしなければなりません。仕事の中に、ご信心の知恵を活かせば、御法の功德の偉大さが更に分かります。仕事をしながらのご奉公は大変ですが、時間がない中を工夫して務めるご奉公が尊いことを教えましょう。

▼信行相続の努力をする……信行相続が難しいと言われるのは、一番身近な存在だけに、ご信心に対する思いの本気度そのまま伝わるからです。ですから逆に、随喜心を持って真剣にご信心をされる方は簡単に相続します。「自分を映す鏡」と真剣に向き合ひましょう。

【御教歌】 口のみ信者は多し吾祖師の 御本意をつぐ弟子ぞすくなく

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ⑦ (H28/5)

「入信当初に教えておくこと」

⑧基本線は最初に教える。

「最初からいろんなことを言い過ぎると、面倒に思われるかも知れない」と用心し、教えるタイミングを逃して苦勞される方がいます。確かに、あれもこれもと一度にすべて教えるやり方は、初心の方に消化不良を起こさせ、それがご信心の正しい理解を妨げることにもなりがちです。育成の仕方は、相手の意欲や理解力に差がありますので一概には言えません。が、初心に解るようやさしく噛み砕き、一つずつ身に付くよう根気よく、植木を育てるように教えなければなりません。しかし、基本線は別、と石岡上人は仰せです。「話が違ふ」「聞いてなかった」とならないよう、最初に丁寧な言葉で教えるのが上手な育成です。

▼御宝前を大事にする……御宝前から功德を頂戴するのですから、そこに敬意を持ち、お仕えするのは基本中の基本です。もちろん、丁寧なお給仕で感得する御利益が、そんなご信心を育てるのですが、まずは御宝前が生きています。仏さまのお住まいであることを教えます。お初水や御供物のお給仕も、それを教える延長です。御宝前専用の備品を用意し、自分の生活用品と区別するのも、仏さまを敬う心と教えましょう。埃だらけの粗末な御宝前ではご信心が育ちません。仏さまの目を意識できない所作からは敬いが生まれません。世間は御神体を乱暴に振り回して平気なのが標準ですが、この違いはきっちり教えます。

▼正しく口唱する……ご信心の有難さを感じるのは理屈ではなく、御題目を唱える体験に依ります。素晴らしいご信者の人柄や、教義の奥深さに随喜してご信心を始める人も、口唱による妙不可思議な世界を実体験で知らない。「不退転の決定心」には至りません。毎日目標を決め、「御本尊を見つめ、ご弘通を第一に祈り、一遍でも多く、姿勢を正し、大きな声ではっきりと、上行所伝の御題目をお唱えする」ことを、繰り返し教えましょう。

▼謗法を払い清める……御題目の御本尊さまへの思いを純化するために、雑念の対象となる謗法物を払うことは、御利益を得る上で絶対に必要です。ただ、人によっては謗法物に「お金をかけた」「大事な人にもらった」等の思い入れがあり、処分に躊躇する場合があります。そんな厄介なものだからこそ、これは最初にお話しておかなければなりません。

▼財の功德……お金を使って自分を磨き、より良い生活を手にするのが現代社会の姿です。当然、ご信心もお金を使って功德を積むのですが、ここを曖昧に済ませると、「またお金の話か」とご信心のことなのに欲の煩惱が罪障を積ませます。「財のご奉公はいろんな形のあつたことを教え、出来ることから挑戦すること」「思いを込めてご奉公すること」「浄財喜捨の精神が大事なこと」等を教え、少しずつでも志厚く功德を積むことを教えましょう。

▼功德を積む……ご信心をすることで果報が変わり、いろんな問題が解決して幸せになったと実感できなければなりません。そのために「功德を積み」、「罪障を消滅する」ご奉公の仕方を学んでいるのです。これを教わっていないと、せっかくなご奉公も「やらされてる」感で消化して、愚痴や不平ばかりで終わります。功德行を喜ぶご信心を教えましょう。

▼教える側の姿勢……教える方が悪くて失敗する人は、「相手が御利益を得て幸せになるために教える」という意識に欠けるケースがよくあります。「こうしないと怒られるんよ」という他人事のような指導や、「早く覚えて代わってよ。私も大変なんだから」的な自分の嫌々信心を押し付けるやり方は育成ではありません。功德の積み方を、丁寧に教えましょう。

【御教歌】 だまされてさいたる室のうめなれば さむい所へ出されざりけり

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ⑧ (H28/6)

【役中の「うんざり」】 ① お敬い

佛立信心が師弟道に厳しいのは、ご信心は知識の修得で完成するものではなく、み仏の心や功德を脈々と師資相承するという仏教の原則を守るために、開導聖人が「我のある者は物が教えにくし。師に向かいながら師の教えを悉く心に受けず。伏せざる我慢あり(略)これを三類の強敵の根本と為す」(H4/T12)と仰せの「我」を、師へのお給仕を通じて無くすためです。故にご信心の師となるには責任感や自覚、知識、技能等の資質や経験が厳しく求められますが、しかし末法の師弟は共に凡夫で、欠点もあります。若い人、キャリアの浅い人、年輩いた人など、物足らなさも見えがちです。だからこそ役中は「聖僧の恩をば凡僧に報ずべし」(G79d)と事相に仕えて現証を顕し、ご信心の筋道を示すのです。

▼身延山御書……お祖師さまは身延山でのご生活を法華経提婆品の故事に重ねられ、「仏の仕え給いて法を得給いしことを、我朝に五七五七七の句に結び置きけり。今如法経のとき伽陀に誦する歌に、法華経を我が得し事は薪こり菜つみ水くみつかへてぞえし。この歌を見るに今は我身につみしられて哀に覚えける也。実に仏になる道は師に仕ふるには過ぎず」(H17d)と記され、釈尊でさえ前世の因行に師匠給仕をされた大事を忘れるなど仰せです。

▼朗門の三則……お祖師さまの門下でも、日朗上人の流れは古来「給仕第一、信心第二、学問第三」と習い、これを「朗門の三則」と言います。日朗上人(1245～1320)は十歳で日蓮聖人のもとに入門し、少年期より常にお師匠のそばに随行してお給仕の誠を尽くされます。ためにお師匠への志しの篤さは門下随一とされ、「師孝第一」の誉れを得るのです。お師匠の入寂の際は本弟子六人(六老僧)に推され、お祖師さまの滅後の教団の支柱となります。日朗上人の門下は、優秀な人材が多く出たことも有名で、朗門の九鳳(きゅうほう)と呼ばれた九人の高弟をはじめ、他の門流に類を見ないほど多くのお弟子が養成されました。これらお弟子方を以て朗門が日蓮聖人門下で最も栄えたのは、元をたどれば師孝第一でお師匠の徳を得る大事を教えた日朗上人のご信心によるものと、師匠仕えを重視するのです。

▼大覚大僧正のこと……皇族出身の大覚大僧正は幼少より嵯峨の大覚寺で修行され、十七歳のときに日像師の辻説法を聴聞して入門されます。日朗上人の晩年は、五年間に十二回も師の日像師に代わって鎌倉に見舞い、日朗上人ご遷化の際も師の代わりに鎌倉に向向されました。この頃の師匠給仕を伝える逸話に「大覚大僧正の油買い」があります。鎌倉から京都に戻った大覚師がご挨拶に伺うと、師は油を切らして暗い部屋にいる。大覚師はそのまま旅装も解かず、油を買いに走ったというものです。開導聖人は、高貴の出自なのに「師を大事、御法大切と思召しし一筋の中より出しご奉公なり」(2/151d)と仰せです。

▼常講歎滅罪抄……開導聖人が信者の最も戒めるべき三カ条を示された二番目に、「人法一箇というを忘れて人を捨るのこと」とあります。本文は「吾祖曰、法華経にはあらね共、この経に名をよせたる人を色にも嫉み、戯れにも軽しめぬれば、法を謗ると同じく無数劫無間地獄に墮つること疑いなしと。されば法は人によりて弘まる。人法一箇これなり。然るに師匠と頼み、法義を学びし御導師を、ある時はほめ敬い、ある時はそしり軽しめ、或時は捨て、ある時は拾い、ある時は頭(こうべ)にいただき、ある時は尻に敷き、口にはほむると言えども心にて殺しなんどせば、仏、不軽品に説かせ給いしが如く地獄免れがたしと蓮隆両祖堅く誠め給えり」とあり、師を軽んじて罪障を積まぬようご指導されています。

【御教歌】 慢心のおこりはじめや師を捨て おのれ師匠にならんとぞする

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ⑨ (H28/7)

【役中の「ころえ」】 ② 御講がすべて

開導聖人は『本門佛立講講旨』と題された文書の冒頭に「本門法華日蓮宗は久遠実成の仏の立てさせ給いし宗旨なる故に佛立宗という。経に云わく、諸経中王最為第一。かくの如く立てさせ給いし故に、その趣を解説教導する故に佛立講と云う」(3/375)と記されて、久遠本仏が「一切の諸の経法の中に於いて最も第一と為す。仏はこれ諸法の王なるが如く、この経もまたまたかくの如し。諸経の中の王なり」(葉王菩薩本事品)と仰せの法華経本門の教えを学ぶ宗旨であるので、「佛立講」と名付けたのだと述べられています。ご信心を学ぶ場の御講制度を整備され、一方で御講を主宰する教師を育成し、また学ぶ教材としての御教歌や御指南書を著されたのもそのためです。そして、そんな御講がどんどん立つ(奉修される)様子を弘通の伸展と喜ばれ、参詣者には「御講は弘通の道場」と教えて、ご信心を磨く場との意識を持たせました。ですから、本門佛立宗の御講には久遠の仏のご信心を学び、弘通者の佛立菩薩を育てていく様々な要素が備わっています。その御講が、開導聖人が意図された通りに厳粛に勤められているか、形骸化して中身を失っていないかを、役中信徒は常に意識してご奉公に臨むよう、石岡上人は指導されているのです。

▼ご奉公のモノサシ……間違ったことを一生懸命にして、「労して功無し」で自己満足しか残らないご奉公は困ります。ですからご奉公がズレないよう、御法門聴聞で修正することを学びますが、これも慣れや慢心で「サカサマに聞く耳」に気付かないことがあって、なかなか難しいのです。「御講が楽々と勤められているか否か」という視点は、そんな私たちにも実に分かり易いモノサシといえます。御講に苦勞するなら、修正点を探せと仰せです。

▼教務さんへの思い……仏弟子として人生を捧げ、法衣を纏う佛立教務も、御題目の功德で包まれた三毒強盛の凡夫で、欠点もある修行途上の未完成品です。若い人、経験の浅い人、最近まで在家で共にご奉公していた人など様々ですから、いきなり敬えと言われても難しいケースもあります。しかし、ここで能所のケジメをつけ、み仏のお使いとしてお仕えできるか否かが御講の要素として重要で、故に役中は率先して敬えと教えられたのです。

▼御布施のこと……御布施は報酬や代金ではなく「功德行」ですから、金額は定まりません。信者は御布施を通じて佛弟子の命を繋ぐ「外護の功德」を積み、迷いの元の執着を断つ「喜捨の功德」を積みます。ご信者の御布施を受ける教務さんは、その大半をご弘通に使いますので、「ご弘通発展に寄与する功德」も生まれます。これらを心得、「精一杯の徳を積ませていただく」との思いでご奉公出来るよう導くのが役中さんで、故に果報を増して組や家庭が発展します。お金のことは打算的になりがちですから、大事なご奉公です。

▼随喜で満たす……せっかくの御講なのに、聞きたくない人の悪口、陰口ばかりという体質ではご信心は育ちません。逆に口の罪障の報いで、ご信者の未来を心配します。ですから、役中さんの心得として、話題への気配りも必要です。予め良い体験談を用意し、口罪障があれば止めます。御講席に相応しくない個人の話題は別の場所で行う配慮も大事です。▼御宝前が中心……必要に応じて徴収し、自分たちの都合で使う、そんな町会の会計のようなお供えの在り方を最後に誠められています。お寺や組の運営に世情の経験を活かすのも良いですが、お金や物を使って「御宝前に思いを届ける」という基本を失うと功德行は絶えます。御講を勤める際の様々なご奉公も、損得ではなく思いが大事と心得るのです。

【御教歌】 御弘通の御奉公とて外になし 御講まありや又つとめたり

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ⑩ (H28/8)

【役中の「組長」】 ③ お役とはどういふものか

開導聖人の興された『本門佛立講』はご弘通のための集団ですから、大勢の人がご信心に励める組織として円滑に機能するために、世話役の「役中」がご開講当初から設けられました。その地域の中心となってご弘通を切り開くご信者は「講元」と呼ばれ、組が形成されると「組長」「副役」「取締」の三役等が置かれたことが御指南書から分かります。

この役中は、町会の世話役のように輪番で勤める役目ではなく、弘通単位の元締めとして、また組内信徒のご信心の親として、半永久的な責任を持つ性格です。また、支配・被支配などの上下関係や、能力の優劣を現すことよりも、佛立菩薩行の実践者としてご信心の手本を示し、他の人のご信心を励ます役割が求められました。ですから、開導聖人は「組長の組を大事と思ふなら勝手つとめに組をもたすな」と御教歌を詠まれて、上に立つて偉ぶりたい慢心者や、他の人のご信心を緩める無責任な怠け者が役中となることを誠められています。お互いに三毒強盛の凡夫ですが、ご弘通の思いをしつかりと持ち、力不足は御宝前のご加護を願って、御法のお役に立つよう努めるのが役中のご信心なのです。

▼役中の果報……開導聖人は「講中分々に御弘通の御用に役目あり(9/325)」と仰せで、果報に応じてご弘通の役目を担うのが役中のご奉公と教えています。分に応じるのですから、したくても徳がなければ勤まらないのが役中ですし、逆に身の果報で頂戴したお役なのに「講内の面々、その役義を断るは不忠の人なり(10/327)」と誠められています。お役が巡ってきたときは、「我等仏祖の御恩に報わんには我も唱え、その組々の長は懈怠を責めて広布を祈り奉るべきなり(9/94)」と口唱の功德で足らずを補って、報恩行に努めるのです。

▼折伏の実践……役中のご奉公の第一は、他の方のご信心を励ますことです。故に折伏を心掛け、口唱や参詣を勧めてください。もちろん折伏は言葉を荒げて叱るのではなく、慈悲の心で丁寧にご信心を教えるのです。開導聖人は「講元、組長としてその人員を預かり、保護する役目として、その講内、組内の御講不参、懈怠、遊惰を責めざるは謗法なり。無慈悲なり(17/295)」謗法を責めぬ役中組長等は不奉公の者なり(14/90)」と仰せです。

▼率先垂範……折伏が使命の役中は、まず自身が実践せよと開導聖人は教えます。なぜなら「人の上に立たん者は、その下に優れたらん者に非ずば下従わず(13/141)」で、たとえば口唱嫌いがお看経を勧めても説得力がないのです。他人にご信心を伝えるには、「行儀悪ければ人が侮る(14/318)」等と、人を導くために努力をするご信心も求められています。

▼異体同心で協力を……そんな役中の信心を持つ人が育ち、増えていくことが、組の発展、ご弘通の伸展に繋がります。「その組にてその組を思わぬ者なし。その家にてその家を思わぬ者なし(略)諸組の盛衰は、その組の一等二等に強信の人の手が揃うと、無きとのあやにて、人の多少にはよらず。御利生を蒙るも信行精進による。我も利生を蒙り、人にも蒙らするにあり(5/38)」と仰せです。互いに人任せで無関心の空気は、弘通の大敵なのです。

▼役中の功德……他の人のための労は何事も大変です。大きなお役になれば、苦労もその分増えるでしょう。ただし、ご奉公の場合は「上役は上役だけの功德大なり(11/370)」で功德も増します。故に「講元の任にありて、その役義を勤むるは大変なりと悦んで御奉公するは勿論なり(11/324)」とも仰せなのです。ご奉公の功德は自身に戻ります。「組長の組内を信行増進せしむるは、我が家の祈祷となるというを覚るべし(9/93)」で勤めましょう。

【御教歌】 一組の長なる人は其組の をこたりせむる役めなりけり

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ⑪ (H28/9)

【役中の「筋を通す」と「心を通す」】 ④ 筋を通すと「心を通す」

仏教は「因果の法」を土台に教えが説かれます。あらゆるものは原因があり、必然として結果を現すという理(ことわり)が、いわゆる「筋」ですから、それを無視した「お看経は嫌いだけど御利益は欲しい」といった筋違いな話は、叶う道理がありません。こうした、誰もが分かりそうな当然の道理さえ外す「筋違い」は、「我見」や「我欲」といった「我」が強くなることで起こります。それは例えば、親の献身的な庇護を得て成長した子供が、自我の芽生えと共に「自分の力で一人前になった」と勘違いするようなものです。ただし、そんな子供も社会人になって周りのお陰を知り、謙虚な心を養うことで親の恩を理解していきます。同様に、ご信心の達者も正しく御法の筋道を心得て、報恩の思いでご奉公できるように成長せねばなりません。そのために「筋を通す心がけを持って」と教えられたのです。

▼筋を通す……テキストには「本山は本(もと)、末寺は末なり。本山盛んにして末寺出来たり(14/333)」の御指南が記されています。本山のお陰で末寺があるので、その恩に報い、本山を盛り立てるのは「筋」です。そこで本山初灯明料や当番参詣、本山奉仕等のご奉公を勤めるのですが、この「筋」が見えないと「本山よりも我がお寺」「我がお寺よりも我が財布」となって、初灯明料も力が入らず、結果として果報を失います。自分の小遣いも欲しいが、小遣いが使えるのも御法のお陰、御法のお陰が得られるのも本山のお陰と、人によつては涙を呑んで節約し、喜捨に励むのが「筋を通す」ということ。果報を増す道です。

▼私の掃除……ところが仏さまの教える功德行の筋道は、時に凡夫の思惑とは逆さまに映りますので、頭では理解していても失敗することがあります。そもそも「仏法の大体は因果なり。善悪応報、少しも違わず(10/201)」ですから、教えの通りなら筋を間違ふことはないのですが、自身の好みや損得、そして経験や知恵が信心に勝つと、「我慢を掘出さねば教えが受けられず(13/15)」で我が強くなり、慢心して教えに逆らい、罪障を積むのです。「信心するものは我慢の我の字の掃除をよくすべきこと(14/359)」と御指南の所以です。

▼素直の稽古……この掃除は、具体的には「信心にしようあり。御本尊の御心にかなうこと第一なり(13/12)」で教えをよく学び、お給仕に徹し、御法の御心に叶うようご奉公に努めることです。ただ、それも自己流の勝手理解だと台無しですので、朗門の三則として師匠仕えを学びます。開導聖人は御指南中に「師は針、弟子は糸」の諺をよく引かれますが、御導師や教務員、幹部役中や教化親など、末法の凡夫同士でも師匠筋との能所を守り、時に無理難題があっても随従すれば、「我慢、我見、我意、我流の我なし。善き信者なり(13/220)」と仰せの「我」を去った、筋道を違えない功德行で「利益が顕せる」ご信心が育つのです。

▼祖師の教えに従う……こうして「我」のない素直な信心前を磨く佛立信者が、最終的に目指すのは、「師の教えに随従して背かざるを孝と云う。宗祖日蓮大士は我等が為には三徳有縁の本師なり(10/249)」と仰せの、お祖師さまの御教えを懸命に実践する「真実の日蓮が弟子旦那」となることです。それは「御本尊は宗祖の御魂なり。宗祖は我等が主師親なり。我等は子なり、弟子なり、家来なりと忘れぬようにご弘通の為に忠孝を尽くすべきなり(7/164)」とあるように、お祖師さまの御心を知り、お祖師さまのお陰に感謝して、ご弘通ご奉公に励むことに他なりません。役中はそんな佛立信者の範となり、常にお祖師さまの御悦びを思い、ご弘通の便宜を最優先にして、筋の通ったご奉公を実践するのです。

【御教歌】 私を捨て仏のみをしへに 従ふ人ぞ利益蒙むる

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ⑫ (H28/10)

「役中のこころえ」 ⑤ 教化子の育て方

ここでは役中さんの大事な心得として、後継者を育て、信行相続をすることを教えておられます。もとよりお役中のご奉公は、町会の役職のような「負担を平等に分担する」ための当番とは意味がまったく違います。あくまで法華経本門に説かれる佛立菩薩行の実践として、御宝前からご弘通のためのお役目を頂戴するのですから、「自分の任期だけ勤めればお仕舞い。後のことまで知りません」では、「ご弘通のためのご奉公」にはなりません。御宝前からお役をいただいたら、「お預かりしたご信者を育て、必ず大きくしてお返ししよう」と心得、絶えずご奉公の仕方、功德の積み方を一人でも多くの方にお教えして、未来永劫まで上行所伝の御題目がたくさんの人々を利益するための盤石の基盤を築いていかねばなりません。その一貫として、未来の弘通者を育てる信行の相続もあるのですから、次世代の育成は疎かにできないのです。自身の後継者を責任を持って育てるのはもちろん、数十年先の未来を見据えた青少年の育成も、役中たる者の大事な務めと心得ましょう。

▼先師のご奉公…高祖日蓮大士は佐渡法難から鎌倉に戻られたあと、幕府に最後の折伏をされて身延山に入られます。この身延の九年間は、自身の信心を未来に伝えるためのお弟子を育てられた時間で、ここで鍛えられたお弟子方が高祖の滅後、全国に散って妙法を弘めました。門祖日隆聖人は晩年に尼崎に学校まで作られて、未来の弘通者を育てました。開導日扇聖人も然り。ご多用なご弘通の日々に少年たちを多数入門させて教育し、未来の佛立のために心血を注がれています。一人の菩薩として弘通の先陣に立たれつつ、自身の命が尽きて後も信心が相続されるよう備えていかれたのが、先師の教えるご奉公姿勢です。

▼「令法久住」の教え…次世代への相続を大事にされたのは三祖のみではありません。釈尊の世から今日に至るまでの相続は、その間の仏道修行者たちの「法をして久しく住せしめよ」との、み仏の教えの実践に依るのです。他国の侵略や国家的な弾圧にすら耐え、先輩方が未来への相続に努めたのは、それが仏さまの教えるご弘通のご奉公だからです。

▼教化子を育てる…この「未来への相続」は、誰か適当な後継者が頭れるのを待つものではありません。石岡上人が、「未来への相続」と「教化子の育て方」を一緒に話されるのは、自身が教化し、自らのご信心を伝えるのが佛立菩薩道であり、つまりは役中のご奉公であるからです。故に「うちの組はいい人材がいらないのよ」と嘆くのは間違いで、それは自身が教化育成を怠っている証と気付かなければ、状況は改善されません。相続を目指す教化の対象は宗外の縁者はもちろん、組内の懈怠信徒や自身の家族まで広くいます。教化親として教化子をお世話し、育てる意識を強く持ち、未来の弘通者をお育てするのです。

▼お金の功德化…育成のポイントとして、お金を使って功德を積むことを挙げています。お金の話は穢れた印象があり、相手も欲の象徴として強い執着を持ちますから、実際にお金の使い方の指導はウヤムヤにされがちです。お祖師さまも「欲深き御坊と思うなよ」と断られて財の功德を説かれますので、指導の難しい分野なのは間違いありません。しかし、ここをキチンと教わるから日常的に功德を積み、生活の基盤となる財の果報も得るのです。▼ご弘通と結びつける…仕事や家を書くのも、洋服や持ち物を求めるのも、ご弘通の便宜を優先する。家族への接し方や言葉の使い方、余暇の使い方を考えるときなども、常にご弘通を意識するようになればご信者らしい人柄に育ちます。意識を変えるのが育成です。

【御教歌】 申置事もうしおくこと更になし信心を 相続しやれ下種の大法

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ ⑬ (H28/11)

「役中の「うらなえ」」⑥ 「奉公は根気よく励むこと」

「三日坊主」という言葉がありますが、「ご信心もせっかくやる気になりながら、続かない人がよくあります。「朝参詣を始めた」「御講参詣に挑戦した」「御法門を筆録しよう」「組内の巡回を始めた」「朝晩のお看経を改良した」「お初を功德箱にお供えた」等々、一念発起して取り組むのですが、いつしか元の状態に……という経験のある方も多いでしょう。開導聖人は「改めざるは未だ信を起さざる人也。根性役に立たぬ也。臆病者に多し」と叱咤されますが、本気で改良し、新たな功德行を続けて身に付けるのは意外と難しいのです。

しかしお祖師さまは、「受くるは易く持(たも)つは難し。さる間、成仏は持つにあり」と教えられました。本当は真実の大法に巡り合うのも難しいことなのですが、それでも「たもつ」、すなわち常に忘れず、「ご信心を続けることに比べれば易しいと仰せですから、いかに上行所伝の御題目のご信心を日々積み重ねることが難しいかが知れます。そして、その難しい「たもつ」ことこそが現証を顕し、仏に成る功德行を完成させると教えられたのです。数日や数か月、あるいは数年で絶えるご奉公では、まだ佛立信心の序ノ口です。

▼**広島東洋カープの大躍進**……日本シリーズでは日本ハムに敗れたものの、今年は広島カープが大いにプロ野球を沸かせました。近年の「カープ女子」や「男気黒田」、「神ってる」等の話題作りも人気を上げた要因でしょうが、今年は圧倒的な強さが何より支持されたようです。もともと市民球団から出発し、経済力に物を言わせる人気球団に比べて戦力補強に劣る取る広島カープが、なぜ強くなったのか。いろんな分野の方が分析されていますが、カープのベテランスカウトの談として「能力の高さはもちろんですが、厳しい練習に耐えられるか否かの人間性を重視します」とあったのは、さすが「育てる球団」と感じました。

▼**「辛抱」の大切さ**……「最近の子は辛抱が効かない」とのセリフを耳にします。しかし、昔から「ならぬ堪忍、するが堪忍」等と辛抱を教え、一方で「濡れ手で粟」と苦労を嫌う慣用句があるのは、昔も今も人の本質に変わりはないということと、同時に根気よく続ける力は、どんな道でも成功の基本であることを教えています。人はいろんな能力を秘めますが、それを開花させ、自身を一つ上の段階へと成長させる鍵は辛抱強く努力を続けることです。開導聖人は「辛抱は出世の資本金ということを忘るることなかれ」と仰せです。

▼**火の信心より水の信心**……お祖師さまは南条さんに送られた書状に、いつも変わらないご信心を褒められて、「そもそも今のとき、法華経を信ずる人あり。あるいは火の如く信ずる人あり。あるいは水の如く信ずる人あり。聴聞するときは燃え立つばかり思えども、遠ざかりぬれば捨つる心あり。水の如くと申すは、いつも退せず信ずる也。これは如何なるときも常は退せず問わせ給えば、水の如く信ぜさせ給えるか。貴し貴し」と仰せです。熱しやすく冷めやすいご信心を、開導聖人は「やかん信心」と誠められました。なぜなら、功德行は派手さがなくともムラがなく、絶やさず流れる水のような姿勢が大事だからです。▼**功德は自身が積む**……世間は「果報は寝て待て」とタナボタを期待し傍観しますが、因果の理では寝ながら待っても良い結果は生まれません。「人にさせせぬをとくかとおもひしに、おのが果報をへらす損あり」と御教歌されるように、偶然や他人頼みではなく、自身がコツコツと功德を積んでこそ、未来の果報が膨らむのです。口唱や参詣、折伏や御有志などのご奉公は、すべて功德行です。嫌がらず、毎日喜んで続けていくことが大切です。

「御教歌」 わするなよまかぬたねならはえもせず まいたたねならはえるものぞと